

# 言語技術教育にかかわる授業実践の開発

## —新聞記者の仕事を教材として—

### Development of Classes in Teaching of Language Arts

#### ・Work of the Journalist as the Teaching Materials・

赤池 香澄

千葉大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻修士課程

本研究では、新聞記者が普段使用している言語技術を分析し、教材化することによって、子どもたちが言語技術を意識的に使えるようになる授業を開発する。新聞記者の仕事の中でも、言語技術が象徴的に使われている「インタビューをする」「記事を書く」「見出しをつける」という作業に焦点をあて授業を行った。授業では、新聞記者がインタビューをする、記事を書く、見出しをつけるという行為を子どもたちの前で本気でやってみせることが中心になっている。そのことにより、子どもたちがその子どもなりに言語技術を使うということを意識して活動するようになった。また、「新聞」という実際に子どもたちのまわりにあるものを作っている過程を体験させることによって、言語技術を生きたかたちでみせたことが、子どもたちの意欲につながった。またこの実践に関しては、『企業とつくるキャリア教育』<sup>1)</sup>に筆者が記述している。今回は、その後23校での実践を通して改善した成果について考察するものとする。

キーワード：言語技術教育、授業実践、インタビュー、作文、見出し、国語

#### 1. はじめに

若者のことばの貧弱さ、コミュニケーション能力の欠如がよくいわれている。

「学校は、いつからか、言葉の力を衰弱させてしまう場所へと変貌してしまったように思われる。」佐藤<sup>2)</sup>は著書の中でこう述べている。原因は何であろうか。それは、学校で教えられることばが、現実に活用されているという実感がもてないからではないだろうか。佐藤は、「言葉の経験は、モノに触れ人と交わる具体的な経験から言葉が選ばれ表現される経験があり、さらには、それらの言葉によって自己と自然や社会との関係を紡ぎあげていく経験である。」という。そうであれば、実際にそのことばを社会で扱っている人を通して学習を進められないだろうか。また、その中に子どもたちが身につける「言葉の力」があるのではないだろうか。

ことばを扱う職業に、新聞記者がある。数多くの職業の中でも、新聞記者は、ことばを様々に扱っている。取材することにおいては、「話す」「聞く」、取材に基づいて記事を書くときには、「書く」、その記事に見出しをつけるときには、「読む」。新聞記者は、そのそれぞれのことばの活動において、「プロ」である。また、新聞は、学校現場の様々なところに用いられている。作業としては、学校新聞作り、インタビュー、新聞記事を読んでスピーチなどがある。扱われる教科も、国語、社会、総合

的な学習の時間など、多岐にわたる。

そこで、本研究では、子どもたちが言語技術を意識して使えるようにするために、次の3つの方針で授業を開発することとした。

- ①ことばを扱うプロであり、子どもたちにも身近な新聞をつくっている新聞記者を教材とすること。
- ②新聞記者の仕事の中でも、特に言語技術を用いている「取材をする（インタビューをする）」「記事を書く」「見出しをつける」という作業を扱う。
- ③新聞記者の「言葉の力」を探りだし、授業の中で子どもがその「言葉の力」を意識して使い、「言葉の経験」をすること。

本授業は、筆者が所属するNPO法人企業教育研究会が、読売新聞東京本社教育支援部と連携して2005年から「言語技術教育プログラム『教育ルネサンス ことばの教室』」<sup>3)</sup>として行ったものである。本授業新聞記者への取材は、同社岡部匡志氏をはじめ多くの方に御協力をいただいた。また、この授業に関しては、『企業とつくるキャリア教育』に筆者が記述している。『企業とつくるキャリア教育』執筆時点では、実施校も少なく、授業開発の途中であった。また、授業の開発過程や結果について言及はしてこなかった。本研究は、その後23校で実践し、改善した成果について考察を行った。

## 2. 目的

言語技術を扱うプロ、新聞記者の仕事を教材として、子どもたちが言語技術を意識的に使う授業を開発する。

## 3. 方法

新聞記者の仕事を観察、インタビューしながら新聞記者が仕事をするために言語技術をどのように使っているのかを探る。そこから、子どもたちが社会に出てから必要だと思われる点、教師からよせられた問題点や子どもたちの活動を比較しながら検討し、授業を開発する。その授業を学校で実施し、子どもの様子や教師の意見からその効果を検証し、授業を改善し、考察する。

## 4. 「記者の仕事」を授業にする過程

### 4.1. インタビューをする

「インタビュー」は、小学校3年生の国語の教科書に取り上げられ、言語能力やコミュニケーション能力を育成するものとして、学校で行われている。社会科や総合的な学習の時間においても情報収集の手段として活用されている。その中で、教師から子どもたちがインタビューをする際の問題が聞かれるようになった。

- ・事前に考えておいた質問しかしない。
- ・一問一答になってしまふ。
- ・「質問すること」が目的になってしまっており、質問をした後の内容を聞いていないことが多い。
- ・メモがうまくとれない。

このような問題がある中でのインタビューは、言語能力育成、コミュニケーション能力育成、情報収集能力育成という目的を考えても、意味がないものになる。

これらを踏まえて、記者が実際にインタビューする様子を観察した。最初は、記者のインタビューから、何かを抽出することが目的であったが、次から次へと繰り出される質問、聞きたいことへどんどん迫っていく様子を感じとれた。そのため、子どもたちにもプロのインタビューの生の様子を見せることが子どもたちのインタビューのイメージをつくることに有効であるのではないかという結論に至った。

また、メモをとることに関しては、子どもたちのメモと比べると格段にはやい、書いてあることが短いということが見て取れた。そこで、インタビューの様子と同時に、メモを見せることができないかと考えた。

また、記者のインタビューを細かくみたり、質問をしたりすることによって次のことがわかった。

- ・うなずいている。
- ・相手の顔を見ている。
- ・笑顔である。
- ・相手の答えやすそうな質問からきいている。
- ・わからないことばなどもしっかりきいている。
- ・いろいろな事実から、自分で推測して質問している。
- ・目的にむかって質問している。
- ・質問はある程度考えるが、それにとらわれず相手の回答にあわせて質問をしている。
- ・ひとつの質問から、どんどん細かい質問をしている。

これらのことは、子どもにとってはわかりにくいことである。そのため、「インタビューのコツ」としてまとめるにした。インタビューのコツは次の3点である。

1. 相手に興味があることを示す。
2. みんなが興味をもちそうなことを見つける。
3. つっこむ。

以上の考察から、子どもたちの現状を踏まえ、次の4点を授業に盛り込むことに決めた。

1. 「インタビューをする」イメージを持つために、プロである新聞記者のインタビューをその場でじかに見る。
2. 子どもたちをインタビュー「すること」に集中させるため、正式な場でのコミュニケーションを体験するため、インタビューする相手は必ず大人とする。
3. 子どもたちが新聞記者になり、ひとりひとりがインタビューすることにより、緊張感をもって体験する。
4. 記者のメモを見せ、キーワードをメモすることを学ぶ。
5. インタビューのコツを伝える。

### 4.2. 記事を書く

筆者がこの授業をはじめる前に、作文を書くことが好きかどうか尋ねると、多くの児童が、首を横に振りいやな顔をするので、「作文、嫌いな人。」と手を上げさせると、7割程度の児童が手をあげる。このことから、作文を書くことは、子どもたちに嫌われる作業であることがわかる。なぜ嫌われるのか、子どもたちの様子から、次の3点を大きな原因と考えた。

1. 自由度が高すぎて、何を書いていいのかわからない。
2. どうすれば良い文章なのかわかりにくい。
3. なにから書けばいいのかわからない。

以上から、次の点を意識して授業を開発することにし

た。

1. 記者にその場で記事を書いてもらうことにより、他の人が文章を書くという普段見られない過程を見て、そこから子どもたちが感じとる。
2. 記者が子どもたちと同じ材料で記事を書くことにより、子どもたちが書くときの指標にする。
3. 記事という、ある程度決まった型の文章を書くことにより、文章を書くことへの抵抗をなくす。
4. 皆が同じ材料で文章を書くことによって、人と作文の書き方を比べることができるようになる。  
(作文では、内容そのものに目が行きがちだが、同じ題材で記事を書くことで文章そのものに着目しやすくなる。)
5. 書く際に楽しくなるような内容にする。
6. コツを明確にする。

同時に、様々な新聞記事を読み、岡部氏に記事を書くことについてインタビューをした。そこから次のことがわかった。

- ・リード文は、その事件がどういうことを簡潔に表すために、5W1Hのうち、いつ、どこで、どうなったかという情報を必ずいれ、それにいくつかの情報をつけていている。
- ・最初の方に重要なことを書き、後ろが切られてもいいようにする。
- ・一文はなるべく短く書く。
- ・人のことばはできるだけありのままにする。
- ・「」は、効果的なところだけ使い、あとは地の文にする。
- ・何回もチェックが行われ、間違いないようにしている。

ここから、子どもたちにまず気をつけてほしいことを3つのコツとしてまとめた。

1. 大切なことから順番に書く。
2. 短い文でかく。
3. 「思う」「らしい」は使わない。

#### 4.3. 見出しつける

教科書の学校新聞の見本や子どもたちの書く新聞を見ると、「運動会!」「今日のできごと」「社会科見学」「係りの仕事について」のようなその記事の核となる内容を表すものではなく、題名のようなものが多い。見出しあただの題名ではないので、見出しつけることを通して、「読む」力を高めたいと考えた。

しかし、普通に読まれている新聞は、小学生の子どもには難しい。ましてや読むだけではなく、見出しを書く

となったらなおさらだ。

このような取材から、見出しの授業をつくる際に次の点に注意することとした。

1. 子どもたちが記事を読み込むようにすること。
2. 短くても正確に記事の内容を伝えられるようなことばを選べるようなコツをつくること。
3. 子どもたちが見出しつける際に使う記事は、しっかりした主張があるものにすること。
4. ことばを吟味するように仕向けられるような記事を使うこと。
5. 子どもがわかりやすいように、自作の記事にすること。
6. コツをわかりやすく紹介するため、クイズという手法を用いること。

新聞記者への取材は、新聞記者の中でも、見出しつける専門の部署である編成部の竹井啓一郎氏にインタビューをした。このインタビューや多くの見出しを見ることによって、次のことがわかった。

- ・記事を読み込み、どこが記事の中心なのかを探し、それを10文字以内で表す。
- ・記事の中心が何なのかということは、「隣の人にこのできごとを伝えるとしたら、何というか」ということでわかる。
- ・プロが書いた記事でも主張がわかりにくく、見出しどとができることがある。見出しつける人が違うから客観的にその記事を読むことができる。
- ・軟派の見出しあは硬派の見出しどと違い、軟派の方が自由度が高い。

これらから、次の3つをコツとしてとりあげることにした。

1. ニュースをざばり書く。
2. 短く具体的に書く。
3. 読む人の知識にあわせてつける。

また、指導する際に見出しの基本がわかる、硬派の見出しの書き方で指導することにした。

### 5. 授業計画

以上のような経過を経て、次の授業を作成した。

#### 5.1. 「インタビューをしよう!」

##### 5.1.1. 目標

「インタビューをしよう!」では、次の5点を目標と

した。

- 本物のインタビューはどんなものなのかを感じる。
- インタビューをする時のコツを学ぶ。
- 分からぬことや疑問に思ったことを大人相手に率直にインタビューを行う。
- あらかじめ考えておいた質問だけでなく、ひとつの質問から、次の質問を考えられるようにする。
- キーワードでメモがとれるようとする。

### 5.1.2. 指導計画

時間数：2時間

時	授業の流れ
5分	1. 記者の必需品のノートを渡す。
10分	2. 新聞ができるまでを知ろう！ ビデオ教材を利用して、新聞ができるまでの過程を知る。インタビューと新聞づくりの関係を知り、新聞記者がインタビューのプロであることを知る。
5分	3. 「スペシャルゲストの仕事をみんなに紹介しよう」 次に行う活動の説明をする。
15分	4. 記者のインタビューをみてみよう！ メモをプロジェクトに写し、メモの取り方も同時に学ぶ。担任の先生にインタビューを受けていただく。
5分	5. 記者のインタビューを見て、感想を発表する。 記者がとったメモをみながら、メモの取り方について知る。
5分	6. インタビューのコツを学ぶ。 ビデオ教材で、記者の方にインタビューのコツを教わる。 記者が行ったインタビューを振り返りながら、インタビューのコツを知る。
	7. 班でインタビューする順番を考え、スペシャルゲストのプロフィールから、質問を考える。
20分	8. スペシャルゲストにインタビューしよう！ 授業者の合図で、班の中で順番に1人2分～3分（人数によって変更有り）交代でインタビューする。
15分	9. 一番伝えたいことを模造紙にかこう！ 班でみんなに伝えたいこと、おもしろかったこと、驚いたことなどを班で話し合い、模造紙にまとめる。
5分	10. 発表しよう！ インタビューしてわかったスペシャルゲストの仕事について班ごとに声をそろえて発表する。
5分	11. 記者が評価をする。 発表をきいての感想や、いい質問や、注意する点についてコメントする。

### 5.2. 「記事を書こう！」

#### 5.2.1. 目標

- 「記事を書こう！」では、次の3点を目標とした。
- たくさんの情報から全体を見通して、書く必要のある事柄を整理する。
  - 大切な事柄を順序立てて書くことができる。
  - 新聞記者が文章を書く過程を見て、プロの仕事を知る。

#### 5.2.2. 指導計画

時間数：2時間

時	授業の流れ
5分	1. 記者の仕事を紹介。 記者は取材をして記事を書いている。
25分	2. 新聞記者は記事をどうやって書いているのだろう？ 記者が取材ビデオ1を見ながら、記事をその場で書く。 子どももメモをとる。 3. 記事にするために足りないところ、聞き逃したところを、授業者にインタビューする。 4. 新聞記事を解説する。 記事の書き方を伝授する。
15分	5. 新聞記者の記事を書くコツをビデオで紹介。 ①大切なことから順番に書く。 ②短い文でかく。 ③「思う」「らしい」は使わない。 (間違いないか何度も見直し、他の人にみてもらう。) 6. 記事を書いてみよう！ 子どもが取材ビデオ2をみながら、記事を書いてみる。 7. 記事にするために足りないところ、聞き逃したところを、授業者にインタビューする。 記者も子どもたちと一緒にインタビューする。 8. 注意事項を確認する。 書くことを優先するため、消しゴムで消さない、間にいれるときも記号をつけていれる。
30分	9. 作業をする。 原稿用紙を配布し、記事を書く。 わからないことがあるときには記者に質問する。 記事を書いていく中で取材ビデオについての疑問が出てきた場合には授業者に質問する。
15分	10. できたとおもったら記者にみせる。 11. 記者が子どもの書いた記事をいくつか選び、コメントをする。

### 5.3. 「見出しをつけよう！」

#### 5.3.1. 目標

- 見出しをつける必要性に気づく。
- 話の一番大切なところを抜き出すことができる。
- 短く、正確に記事の内容を伝える見出しをつける。

#### 5.3.2. 指導計画

時間数：2時間

時間	授業の流れ
5分	1. 新聞の中でも、見出しに注目する。 見出しはなぜついているのだろう？
5分	2. 新聞社の中には、見出しをつける特別の部署があることを知り、見出しが必要であることに気付く。
20分	3. クイズで見出しをつけるコツを学んでいこう！ 例題(子ども用新聞記事)を使ってクイズ形式でコツをつかんでいく。まず、例題をよく読み、3つのクイズをする。ひとつのクイズでひとつのコツが明らかになる。 第一問 見出しにするところは文の中でも一番大切なところを抜き出します。大切なところというのは、隣の人にこの記事は何について書いてあるか説明するときに伝えなくてはいけないところです。この文でいうと「ここ」です。 一つめのコツは「ニュースをざばり書く。」です。 第二問 見出しは長すぎたら読みにくくなってしまいます。たくさん内容がある時には、2つの文にします。また、具体的な事実をかきます。2つめのコツは、「短く具体的に書く。」です。 第三問 見出しは読む人のことを考えてつけなければなりません。見る人が知っている情報、知らない情報を考えて見出しをつけましょう。3つめのコツは、「読む人の知識にあわせてつくる。」です。 4. 3つのコツを学ぶ。
15分	5. 見出しをつけよう！ 2つめの子ども用の記事を配り、読む。 記者のヒントを交えながら、見出しを複数考える。
10分	6. 発表しよう！ 記者が特徴ある見出しをいくつか選び、解説、評価する。
15分	7. もうひとつ、見出しをつけてみよう！ 3つめの子ども用記事を配り、読む。 見出しを複数考える。

15分	8. 発表しよう！
5分	9. 感想を書く。

## 6. 授業の実際

各授業について、実際の授業の様子を記述しながら、考察をする。この授業の様子は、23校で行った授業をもとに、小学校6年生を対象に再構成したものである。表記は、授業の様子を太字斜体で示し、その後に考察を記述する。

### 6.1. 「インタビューをしよう！」

#### 6.1.1. 新聞記者になろう！

「今から、みなさんには、新聞記者の体験をしてもらいます！」いきなりのなげかけに、「えー！」と驚く子どもも、不安気な顔をする子どもも、「たのしそう！」とやる気に満ちた子どもなど、様々な反応が見られる。そこで、新聞記者の仕事について簡単に説明をする。

「では、みんなには今から記者になってもらうので、記者さんの必需品を渡します。それは、なんでしょう？」いっせいに手が挙がり、メモ帳、ペン、マイク、パソコン、ビデオ、カメラ、携帯電話、録音機、などの答えが出る。

「じゃーん！これです」

記者がポケットからメモ帳を取り出す。新聞記者はいろいろな人に取材、インタビューした内容を忘れないようにメモしなければいけない。

「必需品であるメモを持った皆さんは、もう記者です。がんばって記者のお仕事をしてください。」

新聞記者になるということを子どもたちに投げかけるのは唐突であるという見方もある。確かに唐突ではあるが、外部の人が学校に来ること自体、稀なことである。子どもたちの中では、その時点ですでに「なにがおこるかわからない」状態である。この投げかけによって、導入の早い段階で、自分自身が「新聞記者になる」という明確な見通しをもつことができた。

メモを渡すという行為は、「新聞記者」を意識づけるためにも、その後のメモをとるという作業を強調するためにも、重要なものである。子どもたちは、メモを渡されたことによってやる気を出したように思われる。

#### 6.1.2. 新聞記者ひとつ目の仕事—「新聞ができるまで」を知ろう！—

「それでは、記者である皆さんに、一つ目のお仕事をお願いします！記者のみなさんには新聞ができるまでについて学んでもらいます！」

子どもたちは『しんぶんができるまで』のビデオをみながら、一生懸命メモをとるが、なかなかとれない。

ビデオが終わると、「はやいよ！」「もう終わり？」などと口々に感想があがる。

クイズをしながら、新聞記者の数、世界にある拠点の数を確認していく、これにより、新聞は、たくさん的人が協力してつくっていることを知る。

「みんなのクラスと、もう1クラスの人が全員取材にいっても、この一ページの新聞しかできないんだ。」

子どもたちは、「しんぶんができるまで」のメモをすることにより、自分がどのようにメモをとっているか、メモをとるのはなかなか難しいということを感じとっているようである。ビデオが終わった時点でどのくらいメモをとれたかを聞くと、半分くらいという子どもが多く、全部かけたという子どもは少ない。

#### 6.1.3. 新聞記者ふたつの仕事—「インタビュー」をしよう！—

「それでは、新聞記者が『まず』やっているお仕事はなんでしょう？」

記事を書く、取材をするなど、たくさんの答えが出る。

「答えは、インタビューです。そこで、みんなにも、インタビューを体験してもらいます！」

インタビューの練習の仕方について説明をする。

「班に1人スペシャルゲストがきます。その人の「お仕事」についてインタビューをしてください。最後に、その人のお仕事について、驚いたこと、みんなに伝えたいこと、おもしろかったことなどを班で発表してもらいます。」

ここで新聞記者にとってのインタビューの大切さを知る。子どもの内で、これから行うことがここでより明確になる。

#### 6.1.4. 本物の記者のインタビューを見る。

「みんなどんな風にインタビューするのかわからないう思います。せっかく今日は新聞記者がきているので、生のインタビューを見てもらいたいと思います。」

スクリーンにメモを映し、記者がメモをどのようにとっているのかも学ぶ。記者も子どもたちと同じように担任の先生のお仕事についてインタビューをする。

およそ5分のインタビュー。子どもたちは、メモのはやさ、記者が質問を次々に繰り広げていく様子に驚き、教室がざわめく。

「今のインタビューで気づいたことがある人は発表してください。」すると子どもたちは、メモがはやい、字が読めない、書いてあることばが短いなどとメモのことについてあげることが多い。その他には、相手の方を見て話しをしていた、うなずいていた、次々と質問をいついてすごい、質問をその場で考えているという意見が出る。

子どもたちは、特に、メモについての印象が強いよう

である。授業を行った学校の先生からは、この授業後にいった社会科見学で、子どもたちが懸命にメモをとるようになつた姿が見られたということだった。メモについての記者の姿は子どもたちにも印象的であると考えられる。

また、話の聞き方、質問の仕方についても気付く子どもはいるが、ごく少数である。ここから、インタビューの姿から、「記者のすごさ」は感じているものの、「なぜすごいか」ということは、なかなかわかりにくいものであることがわかる。

#### 6.1.5. インタビューの3つのコツ

「じつは、今のインタビューの中に3つのコツが隠されています。」

- 1、「相手に興味があることを示す」
- 2、「みんなが興味をもちそうなことを見つける」
- 3、「つっこむ」

ビデオ教材を使用し、ひとつひとつ子どもたちと確認をする。「いよいよ、次の時間からスペシャルゲストへのインタビューにはいります。がんばろう！」

コツをメモするときになると、今までざわついていた教室も決まって静かになる。大半の子どもたちが、3つのコツをしっかりとメモをし、記者のインタビューのコツについての話を聞く。ビデオ教材でコツを紹介するという効果もあるが、次の時間、自分たちがインタビューをするということに対する意欲がここからうかがえる。

#### 6.1.6. スペシャルゲストにインタビューしよう！

各班に、スペシャルゲストが来て、プロフィール<sup>5</sup>が配られる。子どもたちは、プロフィールを班のみんなで顔を突き合わせてみている。みんな緊張した様子だ。

「よーい、スタート！！」の合図で一斉に子どもたちはインタビューをはじめる。時間は1人2分間。1人ずつインタビューを行う。すらすらと質問をする子ども、考へていた質問が終わってしまつて次の質問をひねり出す子ども、つまつてしまつて他の子どもから助けられる子ども、班により、質問も様々である。間に作戦タイムをはさみながら、記者がアドバイスをする。その言葉をきいて、子どもたちはまた新しい質問を考えだすようだ。

こうして、1人1回インタビューを終える。

最後の子どもが終わる。

「全員終了！お疲れ様です。」

「はー……」緊張がとける。質問を受けているスペシャルゲストも子どもたちも安心した表情をうかべる。

インタビューをしている間、つまつてしまう子どもの様子から、その要因として、次の3点があげられる。

- ①質問の仕方がわからない。
- ②まったく仕事をことを知らず、仕事をことを思い浮かべにくい。
- ③その人の気持ちにまで興味をもつことができていな

①に関しては、子どものインタビューの合間に記者が質問の例をあげることで、改善した。②、③については、主に小学校でも低学年の子どもたちにとって多く見られる傾向であり、子どもたちの認識の発達とも関係しているものと考えられる。そこから、②を改善するために、低学年で授業を行う際は、仕事場の写真をもってきてもらいい、その仕事のイメージをわかりやすくした。また、③に関しては、その人の「気持ち」ではなく、その人の「仕事の様子」について質問をするように、記者のインタビューの例や、質問の例も変更して行うようにした。

その仕事を子どもたちの感想を見ると、「難しかった」という子どもが多い。しかも、決して話すことが得意だから「簡単だった」、苦手だから「むずかしかった」ということではないようである。得意だからこそ、「もっとうまくできると思っていた」、苦手だけど、「記者のインタビューを見てできた」ということがある。ここからわかることは、この授業は、あくまで、言語技術、特に「話す」ということに関して、きっかけにすぎないということである。この授業の中では、うまく質問が伝わらなかったり、相手のいっていることを上手く理解できなかったりするかもしれない。少し伝わることも、すらすらと伝わることもあるかもしれない。友達はうまくいって、自分が失敗するかもしれない。その子どもによって様々だが、それを実際に経験することで、記者というプロの姿との自分を比べ、「話す」ことのその難しさや、簡単さを感じる。そのことが、今後の様々な「話す」場面において、生きてくるのではないか。言語能力やコミュニケーション能力は一回の授業で獲得できるものではない。しかし、そのきっかけになるような授業にはなったのではないだろうか。

#### 6.1.7. みんなに伝えよう！！

いよいよ発表。班でメモをみながら内容を考える。

「お金をあつかう仕事 一円でも合わないと、大変な事になるから、いつもきんちょうする仕事」(経理事務)

「やせたい人や体のよわい人が元気になったらうれしい」(スポーツジムのトレーナー)

「自分が作ったものを全国のみなさんが使ってくれることがうれしくてこの仕事はじめました。よるの十時まではたらいでいて大変だと思った。」(ゲーム機の組み立て)

「きっかけは写真館で親切にもらったりよい写真がとれたから。今は七五三なので一日40家族ぐらい

くる。これからお客様とずっとあえる仕事をつづけたい。」(写真館)

班により、笑いがおきる。どの班も自分たちの班の発表に誇りをもっているようだ。最後は新聞記者のことばでしめくくる。

「これからは、実際によく知っている人に聞きにいくという勉強が増えてきます。これから、そんなときにこの勉強を思いだしてくれたらと思います。」

この作業の中で、メモを見直したり、今までのインタビューを振り返ったりしている。それによって、メモが読めなかったり、これを聞けばよかったと後悔したりする子どももいて、今後に向けての反省にもなっている様子である。また、同じ内容でメモをしているので、班の友達のメモと比べて、参考にしている様子もみられた。

## 6.2. 「記事を書こう！」

### 6.2.1. 新聞記事を書こう！

「取材、インタビューをしました。次は記事を書いてみよう！」子どもたちからは、「えー！」「むずかしそう。。。」という声があがる。

「今日は、ある事件の映像をもってきました。それを見て、記事を書いてもらいたいと思います。実は、私はこの事件を目撃しているので何でも知っています。映像を見て、分からなかつたところを質問してください。子どもたちはまだわからず、不安そうである。

どこの学校にいっても、嫌だという反応が返ってくる。子どもたちの大半は、文章を書くことが好きではない様子である。

### 6.2.2. 新聞記者は記事をどうやって書いてているのだろう？

「いきなり、記事をかくといつてもどうやっていいかわからないよね？だから、記者さんに見本を見せてもらいます。今から、事件の映像を流すので、みんなも記事を書くつもりでメモをとってみてください。おわったら、私に質問してもらいます。」

記者が「事件ビデオ1ダイヤモンド」<sup>6</sup>を見る。子どもたちは意外にはやく終わってしまうビデオにちょっと戸惑っている。ビデオを見終わると、記者がスタッフに質問をする。

「ダイヤモンドは、映像だと、3つくらい映っていたと思ったんですが、実際はいくつでしたか？」  
→実際も3つ見つかりました。

「親子の名前と年齢を教えてください。」  
→古田健さん40歳と、明子さん13歳です。

「ダイヤの重さはどれくらいですか？」  
→約30グラムです。

など。  
「ありがとうございました。さっそく書いてみます。」

ここから、スクリーンでパソコンの画面を映し、その場で記者が記事を書いている様子を子どもたちが見る。子どもたちは、そのはやさに圧倒されている。記者が記事を書くとき、数字のところはしっかり確認したり、あとから見直して文章を足したり、消したり、違う書き方に変えたりしている。これを生でみることがこの後に子どもたちが記事を書くときの書き方につながってくるようだ。

書き終わり、スタッフが記事を読んでみる。子どもたちもスクリーンを見つめ、真剣そうである。読み終わったら、記者がこの記事を細かく解説していく。

事件映像を見ながら、記者と一緒にメモをとる子どもがいるが、なかなか難しい。まだ、何が必要で、何が必要でない情報かわからない様子である。

記者が映像に関して質問している間に理解していくようで、一緒に質問をする子どももあらわれる。

実際に記事を書いてみる場面では、文章を書くすばやさと、どんどんと記事になっていく様子を見て、スクリーンをじっくり眺めている。記者が書くときに字がうまく変換できなかつたりして間違えることがあるが、子どもがしっかりと見ていて、教えてくれる。しっかりと読んでいるということがわかる。

#### 6.2.3. 新聞記事を書くコツ！

「今の記者さんの話の中でも出てきたけれど、記事を書くコツが3つあります。それをビデオにまとめてあるので見てください。」

①大切なことから順番に書く。

②短い文でかく。

③「思う」「らしい」は使わない。

(間違いがないか何度も見直し、他の人にみてもらう。)

ここでは、子どもたちは何のことかピンとこない様子である。

#### 6.2.4. 取材をしよう！

「では、いよいよ、みんなに記事を書いてもらうために事件ビデオを見てもらいます。さつきと同じように、その後、インタビューをしてもらうので、しっかりメモをとって、取材してください。では、さっそく流します。」

子どもが「事件ビデオ2ねずみ」を3回見ながらメモをとる。

「事件ビデオ2ねずみ」は子どもにとっておもしろいものであるらしい。子どもたちはビデオを見ながら笑っている。

子どもたちの様子を見ていると、1回目、2回目でだいたい書き終え、3回目で見直しにはいっている様子である。

#### 6.2.5. 記事にするために足りないところ、聞き逃したところを、授業者にインタビューしよう！

記者も子どもたちと一緒にインタビューする。

「給食のおねえさんの名前はなんですか？」

→中津和子さんです。

「『きのう』っていつですか？」

→昨年、2005年11月9日です。

「なぜ、佐藤くんの家で銅われていたねずみが学校にいたんですか？」

→佐藤くんは、人気のガングネズミを自慢したくて学校にもってきていました。それが逃げました。

「では、次の時間からさっそく書いていきたいと思います。」

1時間目が終了する。

最初は、質問が出にくいが、記者が質問をすると、要領がわかったようで、次々と質問するようになる。

#### 6.2.6. 新聞記事を書こう！

「今の情報をもとに、記事を書いていきます。前の記事をスクリーンに映しておくので、参考にしてみてください。あと、みんなに、たくさん書いてほしいので、消しゴムで消さなくていいです。間違えたら、隣に直して書いてください。間にいれる時も記号をつかって書いてください。」

黒板に修正の仕方を書いておく。

子どもたちは、前の記事と自分のメモをみながら記事をつくっていく。最初は書くことをためらっているが、最初の一文がかけると、次々とかける場合が多い。作文が極端に苦手な子どもは、最初、まわりをみまわして様子をうかがっているが、まわりが書いていると、つられて書き始める様子が見られる。授業を行った学校の先生から聞くことは、「作文が苦手な子どもがこの授業ではよく書いていた」「普段なかなか文章を書けない子も、原稿用紙半分くらいまで書いてすごかった」ということである。これらのことから、記事の授業は、文章を普段あまりかかない子どもたちにとっては意外に親しみやすい授業のようであることがわかる。文章をかけない子には、内容を思い浮かべられない、最初に何を書いたらいいのかわからないといった子どもが多いのではないだろうか。その点、書くことが、映像によって決まっているので、書きやすいのではないだろうか。

また、内容は全員で共通したものについて書くので、文を短くしたり、主語、述語をはっきりさせたり、指導が明確にできるという良い点がある。そのことによって子ども同士で比較することも容易になっていて、自分のものと、ほかの子どものものと見せ合うという様子が多く見られた。

### 6.2.7. 新聞記者にみてもらおう！

記者が子どもたちの間をまわり、子どもたちの記事をいくつかピックアップする。これを実物投影機でスクリーンに映し、みんなで見てみる。

子どもたちは、同じ情報から記事を書いているので、自分の記事と比べている。「これすごい。」「たくさん書いてある。」「これはいらないんじゃない？」といいあつていて。ことばの表現の仕方の違い、語尾の使い方、それぞれの違いが見えるのでおもしろい。

記者が記事にコメントしていく。

記者に自分の記事を読んでもらい、評価してもらうことは子どもあっちにとって嬉しいことのようである。また、前で発表された子どもと自分のものを比較して、似たものがあると、喜んでいる様子が見て取れる。

新聞記事というかたちで書くことによって、子どもが自分で文を評価しやすくなるという利点があることがわかる。

### 6.3. 「見出しをつけよう！」

#### 6.3.1. 見出しへ何だろう？

基本プログラム3つめの授業。見出しをつける。

「インタビューして、記事を書きました。次に何をするでしょう？」

子どもたちは、印刷をする、題名をつける、配達するなど、思いつくかぎりの答えをいう。

「実は次にこの題名をつけます。新聞ではこの題名のことを見出しつけています。見出しがとても大切なもののため、新聞社には、見出しつける特別の部署があるんです。読売新聞社では「編成部」と呼んでいます。新聞の見出しがなぜついていると思う？」

子どもたちは自信をもって答える。すぐ読んでわかるように、全部読まなくてもわかるように・・・。この答えに対して記者が答える。

「そう、みんな正解です。新聞って文字が多いから、ぱッと見ただけでは何が書いてあるかわからない。けど、忙しいときもあるし、朝ちょっと読みたいときがあるよね。あと、このニュース載ってないかなって探す人もいるかもしれない。こんな人たちのために、見出しが読んだだけでなるべく内容がわかるように書いています」

ここでは、見出しがただの題名とは違うということを強調し、今後の活動の意味を深めている。

#### 6.3.2. 新聞にとって、大切な見出しつけるコツを学ぼう！

この大切な見出し。実は3つのコツがある。この3つのコツを、クイズで探り出していく。

「今から、ビデオで、見出しつけるプロ、編成部の堀さんが見出しひいてのクイズを出してくれます。そのクイズに答えながら、見出しつけるコツを学んでも

らいたいと思います。まず、この記事をよく読んでください。ここからクイズが出されます。」

子ども用新聞記事「サファリー」<sup>8</sup>を配布する。配られた瞬間から「サファリーだつて！」「これ本当あつたの？」などと感想をいう。この記事をじっくり丁寧に読んでいく。それまでざわざわしていた教室も静かになる。読むのが難しい子どもは、担任の先生や、スタッフと一緒に確認しながら読んでいく。

「では、さっそく、第1問いってみたいと思います！」

#### —ビデオ—

この記事は、全国で配られます。編成局の人が見出しにしようと思ったところはどこでしょう？

①オリからオスのサファリーが逃げ出した。

②約2000人のお客さんでにぎわっていた。

③ゾウをみられて得した気分

#### —ビデオ終わりー

「えー！」といいながら、もう一度記事を見る子ども、「〇番だよ！〇番。」と自信たっぷりの子ども、様々な反応をみせる。

「では、きいてみたいと思います。①番だと思う人ー！」

①から③まで確認する。いよいよ、クイズの答えをビデオで確認する

#### —ビデオ—

正解は①番。見出しにするところは文の中でも一番大切なところを抜き出します。大切なところというのは、隣の人にこの記事は何について書いてあるか説明するときに伝えなくてはいけないところです。この文でいうと「ここ」です。

一つめのコツは「ニュースをズバリ書く」です。

#### —ビデオ終わりー

正解が発表されると、正解した子どもから「いえーい！！」という歓声があがる。担任の先生に、続きを聞くように注意される場面も。

ビデオが終わると、本物の新聞をみながら、記者が補足の説明をする。

「今日の新聞でもそうだね。まず、この記事で何がニュースなのかってことを考えて、見出しひいています。」

この調子でクイズは進む。

#### —ビデオ—

2. では、編成局の人が選んだ見出しへどれでしょう？

①ゾウ30分後オリに戻る

②ゾウちょっとの間に逃げ出す

③ゾウ脱走

正解③番。見出しが長すぎたら読みにくくなってしまいます。たくさん内容がある時には、2つの文にします。また、具体的な事実をかきます。

2つめのコツは、「短く具体的に書く」です。

3. この記事を埼玉県内だけに配ります。しかも千葉県内

の人はサファリーのことをみんな知っています。さて、どんな見出しつけるでしょう？

①埼玉の動物園 ソウ脱走

②サファリー逃げ出す

③サファリ一体重4トン

#### 正解2番。

見出しへは読む人のことを考えてつけなければなりません。見る人が知っている情報、知らない情報を考えて見出しつけましょう。3つめのコツは、「読む人の知識にあわせてつける」です。

#### —ビデオ終わり—

この3問で3つのコツが出揃う。

子どもたちは、文章を読んでいる。普段、あまり長い文章を読まない子どももゆっくりとではあるが、読んでいる様子も見られた。

#### 6.3.3. 実際に見出しつけるための記事を読もう！

「いよいよ、自分で見出しつけてもらおうと思います」2つめの子ども用の記事「透明人間」を配り、読む。現実にはありえない記事に子どもたちから笑い声がおこっている。授業者がゆっくり読んでみる。子どもたちが目で追いながら、分からぬ漢字を確認していく。

#### 6.3.4. 見出しを考えよう！

「では、この記事の見出しごとく考えてみてください。ひとつじゃなくて、たくさん考えると、いいものが考えつくかもしれません。あとで、何人かに発表してもらいます」

コツをしっかりとおさえようとする子どもから「この新聞はどこで配られるんですか？」と質問がある。

「この新聞は全国に配られます」

さっそくできて、まわりの友達と意見交換している子ども、わからない言葉の意味を近くの大人にきいている子ども、どうしても長くなってしまい、苦戦する子ども、2本見出しえたいという子ども、みんな自由に見出しおこなっている。記者や担任の先生、スタッフも子どもたちの間をまわりながらアドバイスをする。

子どもたちは1回ではなく、何回も文章を読み直しているようである。ただ読むだけではなく、どこが見出しひにふさわしいか探したり、文の中から見出しひに使えることばを探したりしている。また、全国で配られるということを意識して、全国の人に理解してもらえるような見出しおこなっている子どもも見られる。

#### 6.3.5. 発表しよう！

記者が特徴ある見出しひいくつか選び、それを書いた子どもに細長い紙にマジックで書いてもらう。書きたくてしようがない子どもたちが次々と記者を呼ぶ。5本くらい選んだら、黒板に貼る。

子どもたちは前に貼られた模造紙をみて、「自分のと似てるー！」「あれがいい！」と感想をいっている。

ここで記者がそれぞれの見出しひに解説、評価をする。

「この記事なにがかいであるの？」と聞かれたら、まず何て言う？」

「透明人間がでた」という子ども。

「そう。ここでみんなの見出しひを見てみると、みんな透明人間ということばがはいっているね。だからみんな、1つめのコツはOK。では次、他にどんな情報をいれるか」

『友達、透明人間に』

友達といつても全国の人に配るのだから、わからないよね。だから、友達といふのはどうかな？

『田中君透明人間に』

これも同じだね。これが学級新聞だったら、田中君でも伝わるね。けれど、これは全国に配る新聞。

田中君ではわからないよね。どんなことばがいいかな。

『ラムネで透明人間』

原因を書いてくれたんだね。やっぱり読む人はなぜ透明人間になったか知りたいよね。けど、この記事には、「今のところ原因ははつきりしない」と書いてあるから、「？」をつけた方がいいかな。

『山形に透明人間出現！？』

場所も大切な要素だね。「出現」ということばもいいね。

『勝浦の少年透明人間に』

この「少年」というのはわかりやすいね。さっきの「友達」「田中君」よりは全国の人にわかるんじゃないかな。

『山形の小五透明人間に』

これだと、場所もわかるし、透明人間になった人の年齢もわかるね。

子どもによって考える見出しひも様々である。子どもは、基本的に則ったものから、だんだん軟派の見出しひのような少しひねったものを考え出す。周りの人同士で見合ったり、よりよいことばを考え出そうとしたりする様子も見られた。

#### 6.3.6. もう一度違う記事でやってみよう！

3つめの子ども用記事「桜」を配り、読む。だんだんコツをつかんだ子どもたちは、早々と見出しひに取り組んでいる。

2つめの記事と同じように、発表、解説をする。

最後は記者のことばで締めくくられる。

「短い見出しひですけれども、いろいろ考えながらつくられています。みんなも、学級新聞や社会科の新聞をつくることがあると思います。そういうとき、こんな風に見出しひを考えてくれたらもっと読む人が読みたくなる新聞ができるのではないかと思います。がんばってく

ださい。

2回目ともなると、子どもたちは前の問題をもとに、よりよい見出しを考えようとしてくる。文章の中のおもしろいことばをひろったり、よりたくさんの情報をいれたりしている。

総合的な学習の時間等自分たちで調べた情報をホームページで発信しているという小学校では、この授業をした後、子どもたち何人かが、「自分たちでつくったホームページのタイトルを直したい」といってきたという。この授業で、短い文で簡潔に内容を表すことがわかり、実際の使用場面での活用法がわかったのではないかと思われる。

## 7. 結果

このような授業を繰り返し行ったことにより、子どもたちの反応に共通点が見られた。その共通点から、この授業による次の成果が確認できる。

- ①実際に記者が教室にいき、本気の姿を見せるということによって子どもたちがその子どもなりに言語技術を使うということを意識して活動するようになった。
- ②「新聞」という実際に子どもたちのまわりにあるものを作っている過程を体験させることによって、言語技術を生きたかたちでみせたことが、子どもたちの意欲につながった。

また、子どもたちがつまずく箇所も共通していた。次の7点である。

### インタビュー

- ①質問の仕方がわからない。
- ②まったく仕事をことを知らず、仕事を思い浮かべにくい。
- ③その人の気持ちにまで興味をもつことができていない。

### 記事

- ④最初の一文が難しい。(一文を書いてしまえば、その後は書きやすい。)
- ⑤時系列に書くことは簡単であるが、なにかを抽出して書くことは難しい。
- ⑥より具体的に書くことが難しい。

### 見出し

- ⑦読む人を意識して、よりよいことばにするということが伝わりにくい。

今後の課題として、上にあげた子どもたちがつまずく箇所をどう克服していくかということとともに、ゲストをして教室にいく新聞記者により、多少の変更をする必

要があるということがあげられる。今回の授業の内容は岡部氏に協力をいただいたものであり、岡部氏の経験や実感に基づいて授業が構成されている。これまでに何名かの記者と授業をしたが、言語技術という性質上、その記者によって違うところが必ず出てくる。岡部氏以外の新聞記者によって、言語技術授業をする際は、この授業に基づき、その記者に合わせて微調整が必要である。そのことによって、そこにいるその記者の言語技術を伝えることができ、授業が形骸化することなく、子どもたちに記者が実感を伴って伝えることができる。

また、今回、言語技術が定着した、高まったとはいいにくい。しかし、授業の中で言語技術を使うということを子どもたちが意識したのではないかと思われた。言語技術やコミュニケーション能力は一回の授業で獲得できるものではない。だからこそ、ほかの授業において、言語に関する作業の際に、今回のことを見越すことによって、その成果が増すのではないかと思われる。

<sup>1</sup> 藤川大祐編 NPO 法人企業研究会著『企業とつくるキャリア教育』教育同人社、2006年、P70～P87

<sup>2</sup> 佐藤学『教師というアポリティー反省的実践へー』世織書房、1997年、P341

<sup>3</sup> 2007年4月から名称を変更し、「教育ルネサンス ことばの授業」として展開している。

<sup>4</sup> このビデオは、新聞記者が取材をして、記事を書き、新聞が配達されるまでを明らかにしたビデオである。

<sup>5</sup> プロフィールの内容は、授業をはじめた当初は項目がたくさんあったが、子どもたちがその項目に流されてしまう、少ない情報からつっこんできくことに集中できるようにということで、名前、仕事、何年やっているかということに限定した。

<sup>6</sup> 海岸でダイヤモンドが見つかったというニュース風の映像。

<sup>7</sup> 学校の給食室にねずみが出たというニュース風の映像。

<sup>8</sup> サファリーというゾウが動物園から逃げ出したという記事。子ども用に簡単に書いてある。記事のように組んでるので、本物の記事のように見える。